

文藝春秋

大正十二年一月三十日第三種郵便物認可
平成三十一年四月一日発行(毎月一回一日発行)
第九十七巻第四号(三月九日発売)

完全保存版 平成31年を作った31人
「日韓断交」完全シミュレーション 四月特別号



平成31年を作った31人 4 20

將軍の世紀

やまうちまさゆき
山内昌之
武蔵野大学特任教授・
東京大学名誉教授

【第十六回】「庄屋仕立て」から幕藩官僚制へ
血筋、家柄、官位、石高……。將軍家光は、
辛辣な区分けで「大名の序列」を可視化していく。



(上) 家光が最も頼りにした桶狭正勝
(下) 正勝追悼の詩を詠んだ儒者・林羅山



(京都大学総合博物館蔵)

一、轎は恐れあり

江戸時代の武家社会は格式にやかましかった。家光の血が絶え紀州家から入った八代將軍吉宗の曾孫家齊の時のことだ。この十一代將軍が文政十年(二八二七)に太政大臣となった時に、或る事件が起きている。陸奥弘前の津軽越中守信順は、家齊の昇任慶賀のために江戸城に上がった。その時に「轎」に乗ったことが思わぬ波紋を引き起こしたのだ。津軽家はずっと四万六千石で柳之間詰の中大名であった。しかし、蝦夷地警固の重責を理由に寧親の代から十萬石に高直しされ、従四位下侍従に進む家格に上昇したのである。その「轎」または「長柄」とはもともと牛車・馬車の前に長く突き出た二本の棒を指し、転じてそれらの車、ひいては大型で柄の長い高級駕籠も指した。旗本の伊勢貞丈によれば、「四方ごし(輿)」とも称された「板ごし」ながら、「ながえ」が下になく、屋根の上に棒を通した「ながえぎり」という乗物がある(『貞丈雜記』2)。室町時代以降の「ながえぎり」と、合戦時に手負いを乗せた「かご」の様式を合わせて駕籠が高級化し、「轎」や「乗輿」と称する形式に発展したのかもしれない。家光は宮中に参内した時に

「御輦」を使っている(「將軍家光公御上洛之次第」『徳川礼典録』上巻)。「徳川実紀」によれば、二条城出立の行列には「御輦」の字が見え、「四足門にて御輿をかきおろせば」とある(『大猷院殿御実紀』巻廿五)。こちらは絵巻物からしても牛車であろう。

他方、安永五年(一七七六)四月の十代將軍家治の日光社参の行列を見ると「御輦」のすぐ後には「御駕籠頭」が供奉している。また、家齊の礼典のために登城した、久保田(秋田)藩二十萬石の国主・佐竹義厚の「輦」は、「輦舁」二十人を連れていた(松浦静山『甲子夜話』3、巻三十六。6、巻九十四)。万延元年(一八六〇)頃の熊本藩主・細川慶順の「御行列之図」では、参勤交代中の「駕籠」が前三人、後三人で担がれ、多数の控が見える(『細川家文書 絵図・地図・指図編II』)。こうしてみると、津軽の「輦」とは、家治や佐竹の「輦」と質の差はあれ、豪華な駕籠だったのではないか。將軍は溜塗総網代黒塗長棒、佐竹は打揚または腰網代を使っていた。大概の大名は薦包引戸長棒という乗物を使い、棒は檜の白木であった(市岡正一『徳川盛世録』)。

「四品の人」も「輦」に乗れるのか、「隠倫の身は、かゝる雲上のごとは今は露ほども弁へず」と、江戸末期の文化人・松浦静山は皮肉たっぷりに津軽の輦に触れ

る。もともと従五位下壹岐守で五萬千七百石・柳之間に控えた松浦清こと静山としては、津軽家も同格の「諸大夫」だったのに、要領のよい立ち回りに鼻白む気持だったのだろう。静山が四品で大広間控えの佐竹家の輦に不満を言わないのは、左近衛少将まで進める源氏名門の国持大名だったからだ。津軽より格上と納得できる家格なのである。准国持(准国主)で大広間控えになってまもない津軽信順はつい調子に乗りすぎた。登城の帰りは行きとは違う大川端を通り、いかにも輦に乗る身分だと見せびらかすために、わざと迂回したのではと静山は口うるさいのだ。栄耀を人に示すはずが「恥辱を人前に曝す」と。信順の振舞いは、さながらプルタルコス警告を無視したかのようだ。「自分の勝利を調子はずれにきたりにも反して公言していることに、わたしたちが耐え難く感じるの当然である」(『モラリア』7)。

しかし幕府は甘くなかった。越中守信順は、父寧親が輦の使用を希望した時にも「相成りがたし」と却下されたのに、その「心得」もなく、無断使用したのは「不束の儀」として「逼塞」を申し付けられた(文政十年四月二十五日)。名代として親類、出羽亀田藩主の岩城伊予守隆喜が老中列座、大目付・目付同席で言い渡される。この不屈きを見逃した徒目付三人、御小人目付三人は